

石の上にも30年

牟礼・エルバートン親善委員会 時岡 優子

石の上にも3年。どんなに苦しくても大変でもじっと辛抱すれば必ず報われるという意味です。私が関わっている牟礼・エルバートン親善交流は、「石の上にも30年」も続いている素晴らしい活動です。香川県高松市牟礼町は庵治石という世界に誇る花崗岩を産出、加工することで知られている「石のまち」です。またアメリカジョージア州エルバートン市も「GRANITE CAPITAL（花崗岩の首都）」として、知られている「石のまち」です。そんな二つの都市の石材業者が主となりお互いの地域の共通点を見だし、1982年にエルバートン市議会で姉妹都市提携が議決され、翌1983年には、高松市に合併する前の旧牟礼町で姉妹都市提携の調印が行われました。そして2012年に交流30周年を迎えました。その30周年を記念して10月、私たち高松市民記念親善訪問団23名はエルバートン市を訪問してきました。街の中心には訪問を歓迎してくださるバナーがたくさん掲げられ、主要幹線道路にある電光掲示板にはウエルカムメッセージが流されていました。皆さんがホームステイをし、石材業見学、朝食会、中学校見学、高校のフットボールゲーム観戦、記念植樹、ゴルフコンペ、

クルージング、送別夕食会等、行事一つ一つにエルバートンの方々の心遣いが伝わり、胸が熱くなる時を過ごしました。私が最も思い出深いことはフットボール場で応援鉢巻きを観戦に来ていた子どもたち



フットボール場にて

ちに配った時の光景です。多くの子どもたちが列を作って鉢巻きを待っていました。この子どもたちが将来牟礼に来たらこの思い出を話そうと思います。送別夕食会では来賓のアトランタ日本総領事からも、交流に対して熱く称賛のスピーチをいただきました。4日間ではありましたが感動と喜びの滞在となりました。ホストファミリーとの別れはとても悲しい時でしたが、5年後日本での再会を約束しました。

今回実際にエルバートン市に行って感じたことがあります。第一に、まちの様子がとても似ていること、石を加工する機械の音が響き、あらゆる所に石のモニュメントが見られます。

第二に市民の方々が牟礼のことをよく知っていて興味を持っていること。気軽に声をかけてくれて、牟礼からの子どもたちの思い出話をしてくれたり、時にはうどんの好みの食べ方談議がはじまったりします。

第三に人々の気質として、四国に伝わる「お接待」の心と共通する「サザンホスピタリティー」の心が根付いていることです。

これらのたくさんの共通点があることと、先人の方々が丁寧に築いてきた友情、絆、信頼が双方の根源にあるからこそ、長く交流が続いてきたのだと実感しました。

牟礼・エルバートン親善委員会とエルバートン



調印式（1983年 旧牟礼町にて）

姉妹都市委員会が行っている交流活動は大きく2つです。一つは5年ごとの周年訪問事業。これは主に成人を対象としています。もう一つが毎夏に行う高校生の相互訪問交流滞在事業です。毎年6名の高校生と1名の大人の引率者を選抜し、エルバートンから高松に来て2週間滞在し、帰国時に高松の6名の高校生と引率者が一緒に渡航し2週間エルバートンに滞在します。日本滞在中は委員会が香川県内でのさまざまな体験を毎日準備します。週末には一般市民も対象に広島への1日旅行を行い、広島についての理解とエルバートンからの子どもたちとの交流を深める機会になっています。この広島訪問についてはエルバートン姉妹都市委員会からの強い要望があり、交流開始からずっと続けられている行事です。

エルバートンに渡航する日本の高校生も農場見学や高校体験などさまざまな経験をします。エルバートンでの滞在中はすべてエルバートンの委員会が企画運営していただきます。この交流は二つの委員会が同じ思いを持って、続けているのです。

2006年、この交流に大きな転機が訪れました。平成の大合併です。実は今行っている活動は2005年までは旧香川県木田郡牟礼町が行政の一環として姉妹都市交流事業を行ってきたものです。当時行われた合併協議でも姉妹都市の扱いについて協議されました。その最中、この状況を心配された当時のエルバートン姉妹都市委員長トム・エバンス・シニア氏が来日されました。そこで彼は「私は行政の姉妹都市交流の継続を希望してここにいるのではなく、牟礼の皆さんとの友情を大事にして今後とも皆さんとの交流を続けるために来ました」と語られました。私たちはこの言葉で大きく心を動かされました。この来日を機に私たちは「交流をこのまま終わらせるわけにはいかない。なんとか力を合わせてこの交流を続けたい」と決意することになりました。そうはいつでも行政という後ろ盾がない私たちに何ができるのだろうか。不安の中、紆余曲折ありましたが、民間団体「牟礼・エルバートン親善委員会」が発足し、交流を続けることになりました。けれどもそこからが困難の連続です。助成金は今までの8分の1。他は会費



浴衣で記念撮影

と寄付で賄わなければなりません。会費徴収は一軒一軒地道に集金する大変な作業ですが、この交流で進路選択に幅が広がり、大きく人生が変わったと快く協力してくださる方もたくさんいます。中には教師や商社マンになった方もいます。

行事は皆で予算を節約しつつ企画しています。小学校を借りて歓迎会を開催し同時に「エルバートン祭」と称して、地域の子どもたちが参加できるようにしたり、役員でシフトを組み、移動手段や通訳を確保したりしました。仕事、子育て等、さまざまな事情を抱えつつエルバートンへの情熱だけを糧に委員皆がボランティアで協力して運営しています。この交流には地域に根差した交流だからこそその長所がたくさんあります。例えばホストファミリーが困ったことがあっても近所の方が経験を活かして助けあったり、交換学生を知ることが比較的簡単にできたりします。また協力会員や企業の方とも直接会って活動を報告することも容易です。

交流30周年を迎え、その歴史の中の一部に関わることができたことを光榮に思います。

この広い地球の中でお互いが「石のまち」であることがきっかけで言葉も文化も全く違う地域の人々が強い絆で結ばれた奇跡を感謝し、より一層地域に根差した交流として、形式や慣例にとらわれずに、そして何よりも遠く離れたエルバートンの地でも同じ思いの仲間がいることを誇りに、実り多き交流を続けていきたいと思っています。そして「石の上にも100年」を目指します。